

氏名	あき た ま き 秋 田 摩 紀
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学位記番号	教 博 第 63 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	教 育 学 研 究 科 教 育 科 学 専 攻
学位論文題目	近代日本学者の文化誌 ——流行の中の学問——

論文調査委員	(主 査) 教 授 辻 本 雅 史	助教授 佐藤卓巳	助教授 駒込 武
--------	----------------------	----------	----------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の課題は、明治時代から昭和初期にいたるまでの、学者集団固有の文化が成立していく過程を、同時代の文化や社会の歴史的な潮流の中でとらえることに置かれた。流行化された「学問」や学者、文化、文芸、芸能の諸動向をとりあげている。具体的には、戯作、落語、批評、ジャーナリズムなどによって描かれ、とらえられた学者像や学者風刺、学者批判の言説をおもに分析し、学者共同体の文化との相互交渉の歴史を掘り起こしていった。その作業を通じて、近代的な「学者」像が生まれてくる過程や動態を明らかにすることができた。

本論文は、6つの章に、序章、終章を加えた全8章によって構成されている。

「序章」では、問題の所在と本論文の目的を明確にしている。なかでも、従来の学者論や学問論に関する先行研究の射程の狭さを指摘し、学者共同体にみられる文化の形成を、学問以外の文化的メディアとの相互交渉や葛藤において捉えることの必要性を主張している。

「第1章 窮理学の流行—その1」では、明治初期に爆発的に流行した「窮理学」という学問が、どのようにしてブームになっていったのかを、窮理書を執筆した多様な啓蒙家や戯作小説作者に着目して解明している。その過程で、窮理書の執筆が、福沢諭吉らの、明六社に代表される開明派知識人に限られたのではなく、多様な民間啓蒙家や戯作者が参入して、いわば巨大な啓蒙家集団の存在が、学者だけでなく、戯作者との協働によって成り立っていたことを指摘している。

「第2章 窮理学の流行—その2」では、学者による「共同体」創出が、戯作者との差別化を通じてなされてきた過程を解明している。とりわけ窮理書に関わった戯作者の、二律背反的な役割に着目し、窮理学が内包していた論理を追うことで、相互に協働していた啓蒙家集団が分裂し、その中から「学者」が創出されていった過程を明らかにしている。「学者」創出は、有象無象の啓蒙家たちから「学者」を差異化するという論理によってなされたが、「理」によって大衆を説得しようとする「学問」の論拠が、常に「理以外のもの」との差別化に負っているという批判自体は、すでに戯作者の著した窮理学のパロディ小説に内包されていたことを指摘している。

「第3章 学者社会の文化史」では、明治10年代から20年代にかけて、学者たちが共同体を結ぶにいたる諸相を、東京帝大卒業生の交流誌『学士会月報』や同時代のさまざまな学者論の言説に依拠して解明し、それが近代制度に基づく学者たちのアイデンティティの模索の過程であるとともに、彼ら自身が描いた明治前期学者集団の自画像であったことを指摘している。

第4章と第5章では、聴衆の前で話す学者の演説が、学者文化にどのように根付いたのかという問題関心から、伝統的な話芸と学者との間の相互交渉が明らかにされた。

「第4章 演説する学者—その1」では、演説者を鋭く笑う戯作小説がブームになったことに着目し、パロディにおいて交錯する学問と芸能の関係史を、おもに戯作者の側から描いている。とくに瘦々亭骨皮道人に始まる「滑稽演説小説」という新たな小説群を、文学史上に位置づけ、かつその学問史・学者史上における意義を指摘している。

「第5章 演説する学者—その2」では、学者モデルの演説指南書をもとに、学者のあるべき「身振り」を身体技法の観点から明らかにするとともに、明治末から大正にかけての演説文化の定着に、演説指南書が寄与していたことを示した。

「第6章 世紀転換期の学者批評」では、大正期の文芸、なかでも批評文芸において論じられた学者像や学者批評に注目し、明治末から大正、昭和初期における学者と社会のあり方の変化を、学問における「聖—俗」をめぐる議論を通じて明らかにしている。

「終章」では、「学者文化」の内と外を循環的に行き来し、相互を鏡にして「学者」像をとらえてみる本論文の方法論や手法の有効性が改めて確認されている。そのうえで、「学者文化の内と外」という学者集団側が引いてきた「境界線」そのものが、実は一つの歴史的な構成物にすぎないという結論を導くにいたった。こうした視角こそ、近代学問の基盤を現時点から見直し、新たな学者や学問論研究の可能性が拓かれることを示唆して、本論文は閉じられている。

論文審査の結果の要旨

近代日本において、「学者」像や「学者文化」あるいは学者の社会的集団としての「学界」が、その外部世界とどのように関係し、いかなる過程を通して形成され、いかなる特質をもつか、これが、本論文が解明しようとした主題である。その場合、本論文は、大学や高等教育の制度や事実などを解明する実証的な歴史研究の手法をとるのではなく、学者自身の描く自己像、文芸や芸能などのメディアが描く学者像や学者文化を主要な分析対象にしている。この点为本論文の大きな特徴である。その意味で本論文は、近代の学者形成をめぐる思想史もしくは社会史に属する研究であるといえることができる。

本論文は、以下の点において顕著な独創性があり、高く評価できる。

第一に、本論文に類似の先行研究分野には、学問論や学問史研究、科学史や科学社会学などの研究があるが、本論文は、文化史と思想史の方法をとることによって、歴史的・批判的に、先述の課題解明に成功しており、この点において、先行のいずれの研究とも異なっている。その意味において、本論文は、今後の学者社会史や学問史研究において、高く評価されるに値する独創性を有していると見られる。

第二に、本論文の方法上の独創性である。著者は、学者文化を「書く」「話す」「自律的な共同体を作る」の3要素においてとらえている。その上で、「書く」ことを同じくする戯作や文芸、「話す・語る」ことを同じくする講談、講釈、落語、演説などのジャンルとの、相互の関係性において学者文化をとらえ、相互を鏡とすることで写し出されるその特質をとらえようと試みる。たとえば戯作小説に描かれた学者像、演説指南書に見られる学者の身振りや身体技法などを詳細に分析して、学者の他者像と自画像とのせめぎ合いの過程として、学者文化の形成過程を展開してみせる。学者文化の形成過程のこの分析は、鋭くかつ鮮やかで、著者の学問的力量がもっとも顕著に見いだせる点である。

第三に、以上と関わって、戯作文学や語りの芸能などとの相互浸透の過程として学者文化を解明する本論文は、メディアの中の学者像や学問論の分析となっている。それはこれまでのメディア史研究に、新たな視点と課題を提起する研究と評価できる。

第四に本論文は、これまで自明とされた学問ジャンルを越えることで、思いもよらない新たな位相を提示することに成功している。すなわち戯作や文芸批評などの文学・文芸史や、講談、落語などの語りの芸能史といった、これまでの学問史研究とは異なって区分されてきたジャンルに横断的に分け入ることで、学問や学者文化を、文学や芸能と相互浸透し交錯する関係の総体の歴史として描いている。その結果、たとえば文明開化期の窮理書ブームにおける戯作の役割、学者モデルの演説指南書への着目、明治20年代流行の一群の滑稽演説小説への注目など、いずれもこれまでの戯作研究ではほぼ等閑視されてきたテーマを、新たな視点から位置づけることに成功している。この試みは、これまで構想しえなかった独創性と、文学史や芸能史への問題提起的なインパクトを持っている。

第五は、本論文が解明した学者文化の構造的特質に関してである。学者は、自らの正統性を築くために、戯作や講談などといった旧来の文化を必要としながら、他方でそれらを二次的な存在におき、それに優位する論理を構築して、差別化する境界線を引くことによって、自らの学者文化を創出していった過程としてとらえ、本論文はそれを丹念に解明している。すなわち、明治開化期の窮理書ブームの、戯作者仮名垣魯文と開明派啓蒙知識人福沢諭吉との「開化」／「旧弊」の対抗関係図式においてこの原型構造が作られたことを指摘し、加えてこの構造が、以後の日本近代、さらには現代に至るまで、つね

に反復継承されてきたことを強調し、これを本論文の結論としている。近現代の学問文化や学者文化を相対化してとらえる著者の、現代的問題意識の鋭さと批判精神がこうした指摘のうちに見いだせ、説得力を持たせている。

以上本論文は、独創性に満ちたすぐれた論文であるが、審査の過程で以下のような問題点も指摘された。

第一に近代の学者文化において「話すこと」(演説すること)が著者の指摘ほどには不可欠とは言えず、むしろ「読む」ことへの視点の欠落が問題であること、および学者文化の特徴を「自律的な共同体を作る」という観点からとらえることへの違和感、などが指摘された。第二に明治期に形成された「学者文化」をめぐる問題を直ちに現代の学会発表における技法にまで連続させて論ずるには飛躍があることも指摘された。第三に本研究において大学史と関連させた言及がないことが惜しまれること、なかでも大学内における権力的構造と接合して本研究が論じられるならば、さらに大きな成果が得られた可能性があることも指摘された。

しかしこれらは本論文の欠陥というよりも、近代学者文化の形成過程を鋭く且つ鮮やかに解明した本研究に、事後的に見いだされた課題にはかならず、今後十分に克服することが可能であるため、いずれも本論文が達成した学問的価値を損なうものではないと認められた。以上は、委員の一致した意見であった。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。また平成19年2月23日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。